

南琉球におけるサアリ由来の形式の共時的分析について： 多良間方言と波照間方言の比較を通して

麻生玲子（名桜大学）

セリック・ケナン（国立国語研究所）

1. 背景

1.1 「形容詞」という品詞の認定の困難さ

占部（2021：112）は、「琉球諸語において、ものごとの性質を表す（Property concept）語根（PC 語根、下地（2018b¹））は、方言ごとに適用される形態的操作が異なり、また形態的操作に応じて名詞、動詞として振る舞う。これは、日本語において PC 語根は形容詞として個別の語類をなすのに対し、琉球諸語は形容詞が成立する前に日本語と分岐し（名嘉真 1983²）、それぞれの言語・方言ごとに異なる発達を遂げたことによる」と述べている。このような歴史的背景と各方言での並行変化によって、琉球諸語各方言で（形態統語的な）「形容詞」という品詞の認定、あるいはそれに相当すると考えられる語の所属品詞を検討する際には、多少なりとも困難が伴う。

とりわけ、多くの方言で「形容詞」に分類される「サアリ由来の形式（以下、サアリ述語）」は研究者を悩ませる代表格とも言える形式である。サアリ述語とは、形容詞の名詞形に存在動詞「有り」が融合した形式（名嘉真 1992：600）、すなわち「句」から成り立っていると言われている。サアリ述語も各方言で並行的に変化しており、その変化（文法化・融合）の程度にはバリエーションがある。

各方言の文法書等を参照すると、サアリ述語の歴史的な由来は共通認識としてあることが見て取れる。その上で、多くの方言でサアリ述語は共時的に 1 語として扱われ、品詞分類されている。

● 1 語として扱われている方言³：

- 奄美語：奄美大島浦方言（Shigeno 2010）、奄美大島湯湾方言（Niinaga 2014）、奄美大島須古方言（新永 2025）、喜界島上嘉鉄方言（白田 2016）、徳之島伊仙方言（加藤 2020）、沖永良部島国頭方言（横山（徳永）2017）、沖永良部島正名方言（van der Lubbe 2017）
- 沖縄語：伊平屋島方言（Carlino 2020）、津堅島方言（Matayoshi 2010）、首里方言（Miyara 2015）、久高島方言（新永 2016）
- 宮古語：多良間島方言（下地 2006）
- 八重山語：西表船浮方言（占部 2020）黒島方言（原田 2016）、波照間方言（麻生

¹ 本資料では下地（2018）。

² 名嘉真（1992）に所収の論文のため、本資料では名嘉真（1992）。

³ 特に 1 語として扱われている方言に関しては、総合的な文法記述、文法概説を参照した。同一方言に複数ある場合には新しい方のみを使用した。ただし、網羅的に先行文献の調査ができたとは言えないことに注意されたい。

2020)、与那国方言 (Yamada et al. 2015)

一方、少数ではあるが2語としての分析も存在する。1語としての分析が文法化を経て1語化したものであると解釈するのに対し、2語としての分析はサアリ述語本来の句的な性質を保持しているものとして解釈するものである。

- 2語として扱われている方言：(2節で詳述)
 - 2語：沖縄語伊江方言 (狩俣 2024)、宮古語水納島方言 (セリック 2020)
 - 2語寄り (?)：沖縄語金武方言 (玉元 2025)、八重山語白保方言 (占部 2021)

先行研究内で採用されているサアリ述語の代表的な品詞分類・認定方法を、大きく3つ挙げる。見ての通り、句か語かについては韻律的な特徴も本来手掛かりになるはずだが、殆ど考慮されていない。

- 他要素の挿入可能性：要素間に助詞等を挿入できる、あるいはできない (内部要素の結束度)。
- 形態的類似性
語尾：取りうる屈折接辞 (群) が同じ、あるいは異なる。
内部：共通する形態素 (動詞化接辞、形容詞化接辞)。
- 統語機能：他の品詞と統語的特徴が共通している、あるいは異なる。

1.2 波照間方言のサアリ述語に関する記述

先行研究の多くは、上記基準あるいはその組み合わせにより分類・認定している。波照間方言 (麻生 2020) も同様である。その結果、波照間方言のサアリ述語は属性動詞 (動詞の下位分類) として認定されている。

- 他要素の挿入可能性：PC 語根と **ha** の間には助詞等は割り込まない。ただし、**tʰakahan** 「高い」を例にすると、**tʰakaha** の後に焦点助詞等を挿入し、分析的な表現をすることは可能。
- 形態的類似性：取りうる屈折接辞が動詞と類似している (歴史的に存在動詞 **a** 「ある」を含んでいるため当然といえば当然のことではある)。
- 統語機能：一般的な動詞と特徴が共通している。

この他に韻律的な特徴が挙げられる。PC 語根 (**tʰakahan** の **tʰaka**) は固有の韻律を持ち、(サアリ述語では) **ha** は常に高ピッチで実現する。すなわち **tʰakahan** 「高い」は、2 アクセント単位 (**tʰaka** と **han**) からなると分析されている。結果、結束度、形態統語的な特徴、韻律特徴から、**tʰakaha** までを複合的な語幹とし、(動詞の下位分類として) 分類している。

ただし、「自立語が2つ並ぶ「句」と呼べるほど自由ではない。現代では句が化石化しているため、分析の際に1語なのか句なのか決めがたい」(麻生 2020 : 145) とあるように、

分析上の課題として残されている。

1.3 本発表の目的

1.1 および1.2 から、次の2点が問題となる。

- 無理のない説明を行うための手掛かりは他にないのか？
 - 韻律特徴：サアリ述語形式に含まれる語やその品詞の同定の際に、韻律特徴はあまり考慮されていない。しかし、文法化が絡んでいるのであれば、完全なる2語（句）から1語化への度合いを観察するために、あるいはどのような分析方法が妥当か考察する際に、韻律特徴が手掛かりになるのではないか。
- 波照間方言のサアリ述語の分析は妥当か？
 - 麻生（2020）は波照間方言のサアリ述語を動詞の下位分類（属性動詞）として分析しているが、（上記韻律特徴を踏まえた際に）*ʔakaha* のような形式を動詞語幹の一種として（文法化がかなり進んでおり、分解できないと）分析して、本当によいのか？

本発表の目的はこれらの問題を検証することである。具体的には、波照間方言におけるサアリ述語を取り上げ、方言間の相対的な比較および韻律特徴の観察を踏まえつつ、先行研究とは異なる共時的分析を提示する。次節ではサアリ述語の代表的な分析（1語としての分析と2語としての分析）について具体的に見ていく。3節では波照間方言の韻律特徴についての調査結果を述べ、4節で考察する。最後5節で今後の課題と展望を述べる。

2. 句構造を保持している方言の記述と波照間方言との比較

2.1 句構造を保持している方言の記述

サアリ述語が2語からなると分析されている方言として、まず水納島方言（セリック 2020：176）を例に見ていく。

- 一般的な形式：非融合的
 - (1) *takafa ai*
高さ ある
「高い。」
- 融合：オプショナル（自然談話だと *takafa:i* もある。）
- 挿入可能性：可⁴
 - (2) *takafa=du ai*
高さ=焦点 ある

⁴ 他にも、*takafa=mai ai* 「高くもある」など。

「高い。」

- 韻律特徴：2つのアクセント単位を形成（*が有アクセントの韻律語、[]はピッチの上昇・下降を表す）
(taka]fa)* (ai[])*

次に、比較対象として、水納島方言より融合が一段階進んでいる多良間島方言（セリック 2020：122-124）の例を挙げる。

- 一般的な形式：融合的
(3) takafa:r
高さ.ある
「高い。」
- 融合：義務的（takafa ar が許容されない）ただし、過去形の場合は非融合形
(4) takafa atar
高さ ある
「高かった。」
- 挿入可能性：可⁵、その場合、融合はオプションになる
(5) takafa=du ar ~ takafa=daar
高さ=焦点 ある 高さ=焦点.ある
「高い。」 「高い。」
- 韻律特徴：融合・非融合に関わらず、常に2のアクセント単位を形成する。
(ta]ka)*(fa:r[])*、
(taka]fa)*(da:r[])*
(takafa=]du)*(ar[])*

上記の観点より、水納島・多良間島方言では、融合の度合いが低いという点から、サアリ述語を句として分析することが可能である。2つの方言の違いは、多良間島方言の方が義務的に適用される融合規則の範囲がやや広いという点のみである⁶。

このような非融合のサアリ述語は、南琉球だけではなく北琉球でも見られる（伊江島方言（狩俣 2024：69））。非融合の方言（特に水納島方言・伊江島方言）は、琉球諸語の古い形を保持していると解釈でき、このことは、同時に琉球諸語においてサアリ述語の融合プロセス

⁵ 他にも、takafa=mai ar「高くもある」など。

⁶ 下地（2006）は1語、セリック（2020）は2語で分析している。

自体の歴史が浅いことを示唆している。さらに、多良間島方言の例から、たとえ融合が生じても、形態統語的な振る舞い（助詞の挿入可能性）や韻律的特徴（2単位）はそのまま保持されえることも示された。

2.2 1語からなるものとして記述されている方言の記述

次に、サアリ述語が1語からなると記述されている方言として、波照間方言を例に見ていく（接辞境界は省略）。

- 一般的な形式：融合的

(6) t ^h akahan	/	t ^h akahenu
高い.非過去.確信 1		高い.否定.非過去
「高い。／高くない。」		

- 融合：義務的（否定のみオプショナル）

(7) t ^h akaha nenu
高い ない.非過去
「高くない。」

- 挿入可能性：可

(8) t ^h akaha=ndu	aro:
高い=焦点	ある.非過去.確信 2
「高い。」	

- 韻律特徴：2単位

(t^haka)(han)（平進型＋平進型）

水納島方言と比べると、融合が義務的であり、否定の際でも（分析的な表現はオプショナルで）接辞が付加する点から、波照間方言のサアリ形式の融合度合いは高い方だと言える。上記以外の形式を挙げる。

- 1語として分析：t^hakaha (munu)「高い(もの)」, t^hakahata (munu)「高かった(もの)」, t^hakahatan「高かった。」, t^hakahen(a)tan「高くなかった」
- 分析的な表現：t^hakaha daro:「高い。」, t^hakaha nentan「高くなかった。」(参考) ngiboha ga:sj aro:「ただ行きたいだけだ(行きたいだけがある)。」
- 分析的な表現（副詞用法）：t^hakaha narun「高くなる。」, t^hakaha sun「高くする。」

しかし波照間方言の「融合」は、ここではあくまで分節音レベルの話である。従って、通時的に存在動詞が含まれている形式と含まれていない形式（すなわち副詞用法などの語形）

の韻律特徴を比較した際に、どのような結果が得られるか確認する必要がある。

3. 韻律調査と結果

3.1 調査内容

- 調査語彙：^hakaha のように語根が平進型のものでは ha と違いが出ないので、下降型の語彙で調査する。（例：^hacjohan 「風が強い」）
- データの出典：男性1名
- 調査（検索）対象：サアリ述語、副詞用法の音調

3.2 結果

- サアリ述語の韻律
 - 肯定：(○○)(han) は2単位で、han の部分が平進型
^ha]cjo[han 「風が強い」（下降型＋平進型）
 - 否定：(○○)(he[nu])は2単位で、henu の部分が上昇型（セリック他（2022））
^ha]cjohe[nu 「風が強くない」（下降型＋上昇型）

通時的な観点から見ると、han/henu は元の語のアクセントを保持している（a「ある」=平進型、nen「ない」=上昇型）と言える。共時的な観点からは、一般動詞では活用形による平進型と上昇型の交替が認められないので、1語として分析する場合、なぜ音調交替を起こすか説明が必要になる。（句構造からの名残と言えいいのか？）

- 副詞用法の韻律
 前提：同一語として分析する場合、副詞用法もサアリ述語も同じ韻律的特徴を持つはずである。

結果：副詞用法では、ha まで含む形式が1アクセント単位で実現した。

^ha]cjoha na[run 「風が強くなる」（下降型 上昇型）(^ha]cjoha) (na[run)
 (cf. ^ha]cjo[han 「風が強い」（下降型＋平進型）) (^ha]cjo)([han)

- 調査のまとめ

	^h acjoha (narun)	^h acjohan	^h acjohenu
韻律単位数	1 単位	2 単位	2 単位

4. 考察

調査の結果、波照間方言では同じ分節音（例：^hacjoha）からなる語幹であっても、サアリ述語の場合と、naru「なる」の補語の場合（副詞用法）とでは、韻律の観点から同一の語幹と言えないという結論に至った。この違いを考慮すると、サアリ述語 ^hacjohan は（副詞用法をも持つ）語幹 ^hacjoha に単に屈折接辞-n が後続した形式として分析することは難し

い⁷。

- 新しい解釈

- k^ha[cjo]han→k^ha[cjo]ha+[an] （句構造を保持している。）
- k^ha[cjo]ha (narun)→自立形式。副詞（？）

文法化が進んでいる・融合度が高いとされる波照間方言でも、韻律特徴を踏まえるとサアリ述語を（まだ）2語として分析することが可能である。この分析のメリットは音調交代についても説明可能である点である。

- 本発表で提案する分析⁸⁹

(9) t^hakahan

t ^h akaha	an	～	t ^h akaha=an ¹⁰
高さ	ある.非過去.確信 1		高さ=ある.非過去.確信 1
「高い。」			

(10) t^hakahenu

t ^h akaha	nenu	～	t ^h akaha=nenu
高さ	ない.非過去		高さ=ない.非過去
「高くない。」※enuはnenuの縮約形			

5. 今後の課題とディスカッション

今後の課題として、下降型 PC 語根を用い、haを含む様々な形式の（パラダイム全体の）韻律を観察することが挙げられる。

- サアリ述語内に助詞を挿入した場合（予測される韻律を記す。↓は下降型）

- k^hacjoha=ndu↓[aro: （？）
- k^hacjoha↓[daro: あるいは k^hacjoha↓da[ro: （？）
- k^hacjoha=ndu↓na[ro: （？）
- k^hacjoha↓[ga:]sj a[ro: （？）（([ga:])(si)はH1）

- その他の形式の韻律

- サアリ述語が名詞修飾する際（連体形）の韻律：k^hacjoha munu
- 感嘆形：k^hacjohanu:「風が強いよ～」の韻律（cf. ngunu:「行くよ～」）
- 中止形：k^hacjohanu, k^hacjohari「風が強くて」の韻律
- sja 属性動詞語幹と分析していた語幹の韻律（sa/sjaを含む語幹）
- haを含む語幹以外の副詞の韻律

⁷ 当然のことながら、一般動詞の場合は2単位にならない（例：p^hataragu-n「働く」）。

⁸ この分析を採用するためには、別途形態音韻的規則の追加が必要になる（例：a=a→a、a ne→e）。

⁹ 記述文法書を書く際のテクニカルな問題では、この場合、t^hakahaの部分は副詞等で（定義をnaru「なる」の補語になりうるなどし）記述され、サアリ述語は動詞句で記述されることになるだろう。

¹⁰ これは占部（2021）の分析方法である。

サアリ述語の扱いが困難である理由の1つは、冒頭で述べた通り当該形式が文法化の途中にあり、その度合いが方言ごとに異なる点である。本発表では通方言的に融合度が高い方言を例に、サアリ述語を分析する際の目安の1つとして韻律特徴を提示し、韻律的特徴を調べることで採用される分析方法の妥当性を検証することに有効である、と結論付けた。

これまでの記述研究においては、サアリ述語の韻律特徴が考慮されていない傾向にある。その背景には、いくつか理由が考えられる。例えば、そもそも韻律体系の正確な記述が前提となるにもかかわらず、琉球諸語のアクセント体系は全体の把握が難しい点である（五十嵐・セリックの発表を参照）。さらに、一般的に（品詞の同定に大きくかわる）文法語の同定は、形態統語特徴によってなされる（Dixon 2010: 2）ことも挙げられよう。

しかし最後に、波照間方言と同様に、サアリ述語が分節音の側面から融合していたとしても、韻律調査によって2語として分析する方が妥当であるという方言が多いという可能性を指摘する。実際、八重山語に関する発表者らの未公開のデータから、小浜方言や西表祖納方言のサアリ述語は2つのアクセント単位を成している可能性が高いという見通しを持っている。すなわち、これらの2方言についても、本発表で提案した分析が採用可能であろうということである。

参考文献

- 麻生玲子（2020）「南琉球八重山語波照間方言の文法」博士論文。東京外国語大学。
- Carlino, Salvatore（2019）「北琉球沖縄語伊平屋方言の文法」博士論文。一橋大学。
- セリック, ケナン（2020）「南琉球宮古語史」博士論文。京都大学。
- セリック, ケナン・麻生玲子・中澤光平「南琉球八重山語波照間方言辞典に関する中間報告」『言語記述論集』15：193-358。
- Dixon, R.M.W（2010）*Basic Linguistic Theory 2 Grammatical Topics*. Oxford University Press.
- 原田走一郎（2016）「南琉球八重山黒島方言の文法」博士論文。大阪大学。
- 加藤幹治（2020）「徳之島伊仙方言文法概説」『言語・地域文化研究』26：211-227。
- 狩俣繁久（2024）「琉球諸語の形容詞述語文と形態論的な形」『琉球アジア文化論集：琉球大学人文社会学部紀要』10：63-148。
- Matayoshi, Satomi（2010）“Tsukun (Okinawan)”, Shimoji, Michinori, Thomas Prillard (eds.) *An introduction to Ryukyuan languages*. 89-111. ILCAA.
- Miyara, Shinsho（2015）“Shuri Okinawan grammar”, Patrick Heinrich, Shinsho Miyara, Michinori Shimoji (eds.) *Handbook of the Ryukyuan Languages -History, Structure, and Use*. 379-404. Mouton de Gruyter.
- 名嘉真三成（1992）『琉球方言の古層』東京：第一書房。
- Niinaga, Yuto（2014）“A Grammar of Yuwan, a Northern Ryukyuan Language”, Ph.D. Dissertation, University of Tokyo.
- 新永悠人（2016）「久高島方言の簡易文法書」『琉球諸語 記述文法』2：97-113。

- 新永悠人（2025）「奄美大島宇検村須古方言の簡易文法」『琉球の方言』48：75-140.
- Shigeno, Hiromi (2010) “Ura (Amami Ryukyuan)”, Shimoji, Michinori, Thomas Prillard (eds.) *An introduction to Ryukyuan languages*. 15-34. ILCAA.
- 下地賀代子（2006）「多良間方言の空間と時間の表現」博士論文. 千葉大学.
- 下地理則（2018）『南琉球宮古語伊良部島方言』東京：くろしお出版.
- 白田理人（2016）「琉球奄美喜界島上嘉鉄方言の文法」博士論文. 京都大学.
- 玉元孝治（2025）「沖縄北部・金武方言の形容詞形態論」『琉球の方言』48：179-210.
- 占部由子（2020）「南琉球八重山語西表島船浮方言の文法概説」『琉球の方言』44：91-150.
- 占部由子（2021）「南琉球八重山語石垣島白保方言の記述研究」博士論文. 九州大学.
- van der Lubbe, Giis（2017）「琉球沖永良部語正名方言の記述文法研究」博士論文. 琉球大学.
- Yamada, Masahiro, Thomas Pellard, Michinori Shimoji (2015) “Dunan grammar (Yonaguni Ryukyuan)”, Patrick Heinrich, Shinsho Miyara, Michinori Shimoji (eds.) *Handbook of the Ryukyuan Languages -History, Structure, and Use*. 449-478. Mouton de Gruyter.
- 横山（徳永）晶子（2017）「琉球沖永良部島国頭方言の文法」博士論文. 一橋大学.